

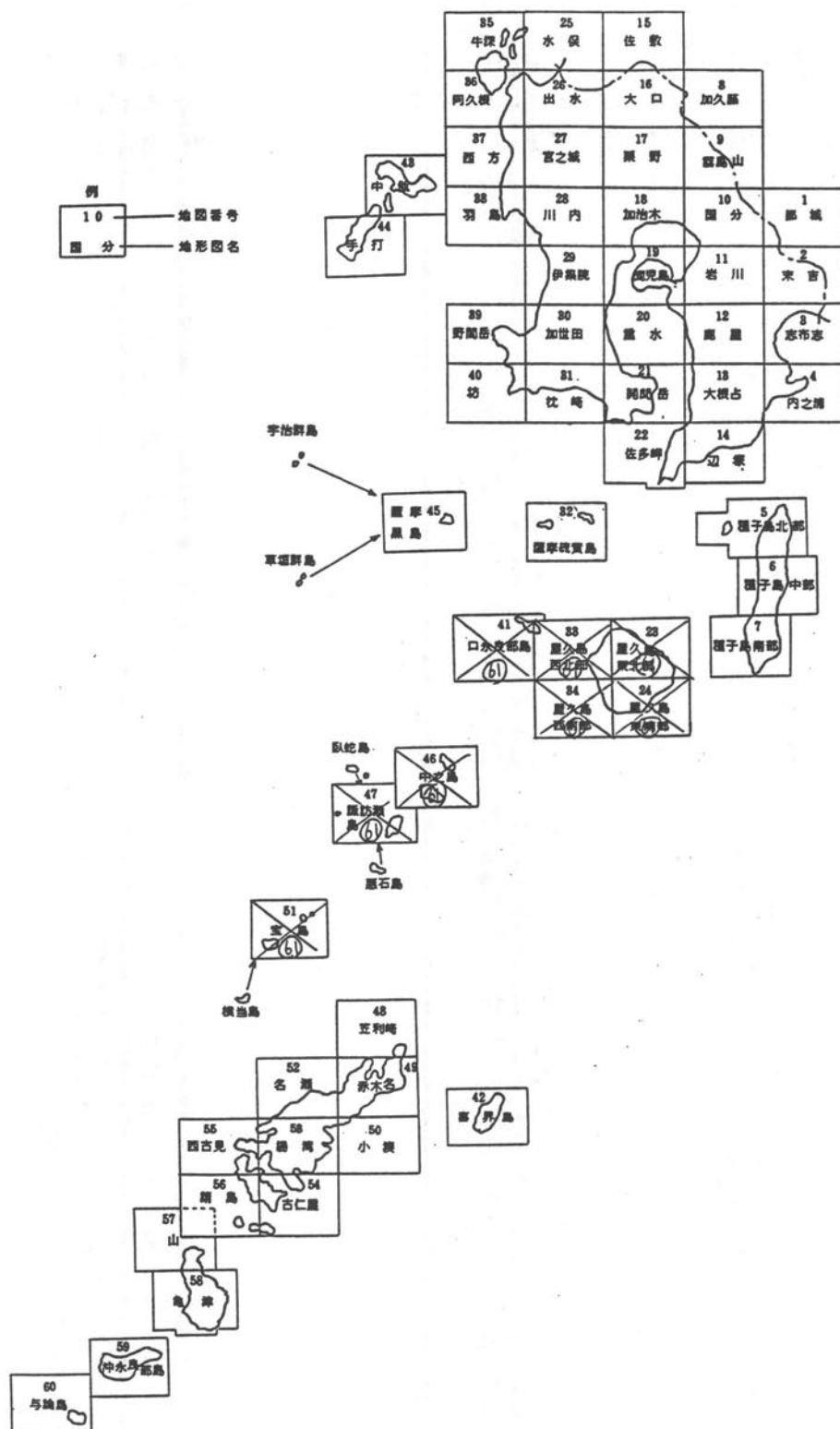
目 次

1. 調 査 概 要.....	1
2. 調査対象地域図.....	2
3. 鹿児島県の植生の概説	3
4. 凡例解説（第3回調査の対象地域について）.....	7
5. 植 生 調 査 表.....	37
6. 資 料 リ ス ト.....	191
7. 調査担当者名簿.....	192

1. 調 査 概 要

第2回調査での対象地域は主に自然公園や自然環境保全地域等の存在する5万分の1地形図(24図幅)の地域であったが、今回は残りの36図幅について昭和58年度から昭和61年度にかけて全地域現地調査により、植生図及び植生調査表を作成し、既存の資料を参考にしながら報告書を取りまとめた。

2. 調査対象地域図



3. 鹿児島県の植生の概説

鹿児島県は九州最南端に位置する県本土と西部には長島諸島や甑島列島および宇治・草垣の無人諸島がある。南部には種子・屋久島とその属島に続いてトカラ列島を経て奄美諸島へと連なり、南北およそ600Kmにも及んでいる。植物地理学的には東南アジア区系統に属する奄美諸島と日華区系統に属する種子・屋久島以北との境界をトカラ海峡に想定している。したがって、トカラ海峡を距ててその南と北ではフロラの著しい相違がある。

植生学的には海拔高1,200m附近までは常緑広葉樹林のヤブツバキクラス域、それ以上の高地は夏緑広葉樹林のブナクラス域に属している。また、屋久島の海拔高約1,800m以上の山頂部には亜高山性の自然低木林や自然草原が発達し、霧島山系の山頂帯には相観的に偽亜高山性ともいふべき自然草原の発達も見られる。地形・地質にも多様であり、それぞれの地形や地質に対応する植生が配分されており、景観的にも多様である。

1. 隆起珊瑚礁植生

奄美諸島やトカラ列島南部には隆起珊瑚礁から成る石灰岩地が見られ、イソマツ — モクビャッコウ群集、ソナレムグラ — コウライシバ群集、テンノウメ — ハリツルマサキ群集などの隆起珊瑚礁特有の植生が発達している。

2. 海岸砂丘地植生

吹上浜や志布志海岸その他の海岸その他の海岸砂丘地にはハマグルマ — コウボウムギ群集、ケカモノハシ群集、ハマヒルガオ群落、ハマゴウ群落などの砂丘植生が発達している。種子島ではハイネズ群落が見られ、それ以南ではオキナワハイネズ群落となっている。また、グンバイヒルガオ群落、ツキイゲ群落、シマネナシカズラ群落などは奄美大島からトカラ列島、種子・屋久島などにも見られる。

奄美諸島や宝島などでは海岸砂丘地の草本植物群落の後方にクサトベラ・モンパノキ群落に続いてアダン群落やオオハマボウ群落などの木本植物群落が発達して亜熱帯的景観を示している。また、アダン群落は中之島に、オオハマボウ群落は種子島に、クサトベラ群落は屋久島に見られる。

3. 塩生地植生

定期的に塩水につかる河口附近の泥湿地に発達するシオクグ群落、ナガミノオニシバ群落、ヒトモトスキ群落の塩沼地草本植物群落の小規模な群落が各地に見られる。

塩沼地木本植物群落を代表するメヒルギ群落は奄美大島ではオヒルギやサキシマスオウノキ、シマシラキなどを含む群落も発達している。メヒルギ群落は屋久島・種子島を経て揖宿郡喜入町にも見られる。ハマザンショウ群落は種子島や阿久根市にも見られ、ハマボ

ウ群落も狭少であるが見られる。奄美大島ではサガリバナ群落も発達している。

4. 海岸岩崖地植生

沿海の岩崖地や岩地、急傾斜地などにはホソバワダン—ボタンボウフウ群落、サツマノギク—ホソバワダン群落などの草本植物群落が発達している。サツマノギクに代ってノジギクとなっていてところもあり、トカラ列島や奄美大島ではオオシマノギクに代っている。

海岸風衝低木材は潮風の影響を強く受ける海浜の岩崖地や岩地に発達する硬葉低木林群落で、トベラーウバメガシ群集、マサキ—トベラ群集、オニヤブソテツ—ハマビワ群集、ホソバワダン—マルバニッケイ群集、モクタチバナ—マサキ群落、シャリンバイ—ハマヒサカキ群落などが各地の海浜に見られる。

ソテツ群落は奄美諸島の岩崖地に発達しており、県本土南端まで見られるが、トカラ列島では見られない。奄美大島では植林されたソテツ群落も各地に見ることができる。

ビロウ群落も海岸風衝低木林の発達するような海浜、海岸の急崖地などに見られるが、古くから利用され伐採されてきているので減少しつつある。現在は宝島、佐多岬一帯、志布志湾の枇榔島、宇治群島（向島）、串木野市羽島などに残存している。

奄美諸島では急傾斜の岩礫地にイトバシロウ群落が発達している。

5. 常緑広葉樹林

(1) タブ群落

海岸林に続く平地や低地にはタブ群落が発達している。奄美諸島では亜熱帯的特徴のグミ—モドキ—クスノハカエデ群落、ハマイヌビワ—ガジュマル群落、アカテツ—ハマビワ群集、ハドノキ—ヒカゲヘゴ群落、オオイワヒトデ—タブ群落などとして発達している。アコウ—タブ群落は屋久島や種子島でも見られる。県本土ではムサシアブミ—タブ群集が大隅半島一帯の海岸地帯に発達しており、イノデ—タブ群集が各地に発達している。

(2) シイ群落

鹿児島県の自然生森林植生の代表で最も広大な面積を占めているのがシイ林である。奄美諸島では沖永良部島のアオバナハイノキ—スダジイ群集、低山地のケハダルリミノキ—スダジイ群集、高山地のアマミテンナンショウ—スダジイ群集などが発達している。屋久島や種子島ではヤクシマアジサイ—スダジイ群集やギョクシンカ—スダジイ群集が海拔高約600mまで見られる。トカラ列島のスダジイ林もほぼ同質の群落と見做すことができる。県本土ではミミズバイ—スダジイ群集として海拔高約450m以下の森林をおおっている。

スダジイ林に続く高地の海拔高約450m～900m附近にはイスノキ—ウラジロガシ群

集が発達している。

アカガシ林はイスノキーウラジロガシ群集帯にミヤマシキミーアカガシ群集として局所的に発達している。

6. 常緑針葉樹林

霧島山系，高隈山その他の高山地の海拔高約800m～1,100mにはモミ・ツガを主とするシキミーモミ群集が発達している。常緑広葉樹林のヤブツバキクラス域と夏緑広葉樹林のブナクラス域の移行帯に発達する群落ある。

アカガシ群落は特に霧島山系でよく発達している。モミヤツガと混生している林分も多い。植林も広く行なわれている。

ヤクスギ林は屋久島の象徴でもあり，海拔高約650mから1,850 m附近までの広い範囲にわたって発達している。海拔高約1,200 m附近までは常緑広葉樹林と，それ以上では夏緑広葉樹林と混生している。

7. 夏緑広葉樹林

霧島山，紫尾山，高隈山の海拔高約1,000m附近にブナ群落が小規模ながら発達し，我が国ブナ林の南限となっている。霧島山や高隈山の群落はシラキーブナ群集，紫尾山のものはオオマルバノテンニンソウブナ群落に含まれるものと考えられる。

ミズナラ群落はリョウブーミズナラ群落として特に霧島山系ではよく発達している。また，ハリモミ群落は霧島山系の韓国岳に局所的に見られる。

8. 亜高山性植生

屋久島の山頂帯海拔高約1,600m以上の山地にはヤクシマジャクゲーミヤマビャクシン群集の亜高山性風衝低木林が発達している。それに続く山頂一帯はヤクザサ群落（ヤクシマダケ群落）でおおわれている。また，この山頂帯の岩隙地などにはツクシゼリ，コイワカンスゲ，コメススキなどで構成される亜高山性矮性草本植物群落が発達している。

花之江河湿原には高層湿原を代表するイボミズゴケやワタミズゴケを主とする群落が発達している。小花之江河や鹿之沢などの湿原も同じような植物群落が見られる。

霧島山系の海拔高約1,200 m以上の山頂部一帯には山地風衝草原のマイヅルソウミヤマキリシマ群集が発達している。相観的に偽亜高山性植生ともいえるべき草本植物群落である。

9. その他の植生

(1) 火山植生

桜島，霧島山系，トカラ列島の島々には火山植生の発達が見られる。イタドリースス

キ群落やタマシダーイタドリ群落などの草本植物群落が発達している。トカラ列島ではイタドリーハチジョウススキ群落となっている。低木群落としてはトカラ列島にマルバサツキーシャシヤンボ群落が発達し、高木群落としては桜島や諏訪瀬島でヤシヤブシ群落の発達が見られる。また、桜島ではクロマツーヤシヤブシ群落も見られる。

(2) 河辺や湿地の植生

河辺や湿地にはヨシ群落（セイコノヨシを含む）、シチトウイ群落、マコモ群落、ヒメガマ群落、ダンチク群落、ツルヨシ群落などの草本植物群落やジャヤナギ群落などの木本植物群落が見られる。

(3) 竹 林

県南端以南特にトカラ列島ではリュウキュウチク群落の発達は著しい。森林の破壊が進むにつれ、メダケ群落やホテイチク群落の占有の度合いは高くなりつつある。

(4) 植 林

常緑広葉樹林を主とする自然林を伐採した跡地にはスギやヒノキの植林地が極めて広大な面積を占めている。広葉樹林とのバランスを考えるべきであろう。内陸地ではアカマツ、沿海地ではクロマツの植林地も多い。特に砂丘地におけるクロマツの植林地は広い。宝島や喜界島などのモクマオウ植林地も広大な面積を占めている。

4. 凡 例 解 説

表示番号	群落名
1	シラキーブナ群集
2	アカマツ群落
3	自然低木群落
4	ミズナラーリョウブ群集
5	ミヤマキリシマーマイズルソウ群集
6	ヤシャブシ群落
7	自然草原
8	カシワ－ミズナラ群落
9	アカマツ群落
10	ツクシウツギーノリウツギ群落
11	ススキーミヤマキリシマ群落
12	モミーシキミ群集
13	ツガーハイノキ群集
14	イスノキーウラジログシ群集
15	アカガシ群落
16	イヌツゲーハイノキ群落
17	スギ天然林
18	アラカシ群落
19	アマミアラカシ群落
20	マテバシイ群落
21	イチイガシ群落
22	サカキーコジイ群集
23	スダジイ群落
23-1	ヤクシマアジサイ－スダジイ群集
24	ミミズバイ－スダジイ群集
25	リュウキュウアオキ－スダジイ群集
26	アマミテンナンショウ－スダジイ群集
27	ケハダルリミノキ－スダジイ群集
28	アオバナハイノキ－スダジイ群集
29	オキナワウラジログシ群集
30	タブ群落
31	ムサシアブミ－タブ群落
32	クスノキ群落

- 3 3 ホソバタブ群落
- 3 4 ウバメガシ群落
- 3 5 ウバメガシトベラ群集
- 3 6 マサキートベラ群集
- 3 7 オニヤブソテツーハマビワ群集
- 3 8 アカテツーハマビワ群集
- 3 9 アカマツ群落
- 4 0 クロマツ群落
- 4 1 河辺ヤナギ低木林群落
- 4 2 ソテツ群落
- 4 3 ビロウ群落、ヤシ群落
- 4 4 ナガミボチョウジークスノハカエデ群落
- 4 5 マングローブ群落
- 4 6 ガジュマルークロヨナ群集
- 4 7 サガリバナサキシマスホウ群落
- 4 8 リュウキュウマツ群落
- 4 9 コナラ群落
- 5 0 シイ・カシ萌芽林
- 5 1 ハクサンボクーマテバシイ群落
- 5 2 伐跡群落
- 5 3 ベニバナボロギクータンドボロギク群落
- 5 4 ササ・タケ群落
- 5 5 ダンチク群落
- 5 6 リュウキュウチク群落
- 5 7 ススキ群団
- 5 8 チガヤーススキ群落
- 5 9 シバ群団
- 6 0 ハイキビ群落
- 6 1 路傍雑草群落
- 6 2 セイダカアワダチソウ群落
- 6 3 ヨモギ群落
- 6 4 アカマツ群落
- 6 5 クロマツ群落
- 6 6 クズ群落（林縁性釣るー低木群落）
- 6 7 ヨシクラス（低層湿原・セイコノヨシを含む）

- 6 8 ウキクサ・ヒルムシロクラス
6 9 塩沼地植生
7 0 シオクグ群落
7 1 ハマボウ群落
7 2 砂丘植生
7 3 ハマグルマーコウボウムギ群集
7 4 ハマグルマーハマゴウ群集
7 5 グンバイヒルガオークロイワザサ群落
7 6 ツキイゲ群落
7 7 ハチジョウススキ群落
7 8 ノジギク群落
7 9 オキナワギクハチジョウススキ群集
8 0 コウライシバ群集
8 1 隆起珊瑚礁植生
8 2 イソマツモクビャッコウ群集
8 3 クサトベラーモンパノキ群集
8 4 アダンオオハマボウ群落
8 5 火山荒原植生
8 6 イタドリヤマシダ群落
8 7 火山性ヤシャブシ群落
8 8 クロマツヤシャブシ群落
8 9 アカマツ植林
9 0 クロマツ植林
9 1 スギ・ヒノキ・サワラ植林
9 2 リュウキュウマツ植林
9 3 モクマオウ植林
9 4 外国産針葉樹植林
9 5 クスノキ植林
9 6 マテバシイ植林
9 7 ソウシジュ植林
9 8 落葉広葉樹植林
9 9 外国産広葉樹植林
1 0 0 竹林
1 0 1 モウソウチク林
1 0 2 常緑果樹園

- 1 0 3 茶畑
- 1 0 4 畑地雑草群落（シロザクラス）
- 1 0 5 ヒメムカシヨモギーオオアッレチノギク群落
- 1 0 6 牧草地（人工草地）
- 1 0 7 水田雑草群落（イネクラス）
- 1 0 8 休耕田雑草群落（タウコギクラス）
- 1 0 9 市街地
- 1 1 0 緑の多い住宅地
- 1 1 1 工場地帯
- 1 1 2 造成地
- 1 1 3 干拓地
- 1 1 4 自然裸地

《ブナクラス域自然植生》

1, シラキー ブナ群集

(相観) 夏緑広葉樹の高木林

シラキーブナ群集は鹿児島県においては紫尾山、霧島山系、高隈山系の約1000m以上の山頂部や稜線部に発達していて日本における分布の南限となっている。高木層や亜高木層はブナ、アカガシ、シロモジ、ソヨゴなどの優占度が高く、草本層はオオマルバテンニンソウの優占度が極めて高い。また、林床にササ類が特徴的に出現しない点は霧島山系や高隈山系の群落と異なる。

2, アカマツ群落 欠

3, 自然低木群落

(相観) 常葉広葉樹の小低木林

屋久島の約1600m以上の高地に発達する風衝性低木林で、ヤクシマシャクナゲ、ミヤマビャクシン、ツゲ、ヒメヒサカキ、ハイノキ、アセビなどの常緑性低木がおもな群落構成種となっており、シャクナンガンピ、ヤマボウシなどの落葉性広葉樹も混生している。

草本層にはキッコウハグマ、コミヤマカタバミ、ヒメツルアリドウシ、ツルリンドウ、ヤクシマムグラ、ヤクシマママコナ、ヒメカカラ、ヒカゲノカズラなどの草本植物が生育している。部分的にヤクシマシャクナゲの優占する群落やミヤマビャクシンの優占する群落、ヤクシマシャクナゲの優占する群落などがある。

4, ミズナラーリョウブ群集 欠

5, ミヤマキリシマーマイズルソウ群集 欠

6, ヤシャブシ群落 欠

7, 自然草原

(相観) ヤクザサ草原・岩隙地草本群落・湿原等

屋久島の主峰宮之浦岳をはじめ永田岳、黒味岳などおよそ1600m以上の高地帯は草丈1m以下のヤクシマダケの草原によっておおわれている。部分的に自然低木群落が発達しているが、その他はこのヤクザサ草原となっている。群落内にはアセビ、ヤクシマシャクナゲ、ハイノキ、コイワカンスゲ、イトススキ、ヤクシマノガリヤスなどが生育している。

山頂帯や稜線の岩隙地や岩塊地等にはヤクシマアザミ、ヤクシマママコナ、イトアオスゲ、ヤマカモジグサ、ヤマヌカボなどを主とする多年性草本植物群落が発達している。

露出した岩盤上に流水のあるところにはヒロハコメススキ、ヒメコイワカ

ガミ、ツクシゼリ、モウセンゴケ、ヒメウマノアシガタ、ダイモンジソウなどの生育するこがたの草本植物群落が発達している。

花之江河や小花之江河、鹿之沢などの湿原にはヤクシマホシクサ、コケオトギリ、コモチゼキショウ、エゾハリイ、コイヌノハナヒゲ、コケスマレ、カリマタガヤ、ヤマヌカボ、ミズゴケ類などで構成される湿原植物群落が発達している。

《ブナクラス域代償植生》

- 8, カシワーミズナラ群落 欠
- 9, アカマツ群落 欠
- 10, ツクシウツギーノリウツギ群落 欠
- 11, ススキーミヤマキリシマ群落 欠

《ヤブツバキクラス域自然植生》

12, モミーシキミ群集

(相観) 常緑針葉樹の高木林

海拔高およそ800m以上の高地に発達するモミーシキミ群集は鹿児島県と熊本県の境の紫尾山塊などでみられる。高木層や亜高木層にはモミノキの他にイスノキ、ウラジログシ、アカガシ、サカキ、ヤブツバキ、イスノキなどの優占度が高く、低木層にはハイノキ、シキミ、ヒサカキ、イヌガシ、アオキ、ハクサンボク、ネズミモチなどが優占的に生育している。草本層にはフユイチゴやハナミョウガ、キジノオシダなどが多くみられる。即ち、イスノキーウラジログシ群集やアカガシ群落などと群落の構成種においては差違は殆ど認められない。

13, ツガーハイノキ群集 欠

14, イスノキーウラジログシ群集

イスノキーウラジログシ群集は海拔高約500mから900m位の範囲に分布している。高木層はイスノキ、ウラジログシ、アカガシ、スダジイ、タブノキなどによって構成され、亜高木層や低木層はヤブツバキ、サカキ、イヌガシ、ネズミモチ、シキミ、ヤブニッケイ、シキミ、ハクサンボク、イズセンリョウ、ヒサカキ、シロダモ、サザンカ、ミミズバイその他によって構成されている。草本層はキジノオシダ、フユイチゴ、ミヤマトベラ、イナモリソウ、コバノカナワラビなどが生育している。

15, アカガシ群落

(相観) 常緑広葉樹の高木林

イスノキーウラジログシ群集やモミシキミ群集の発達する海拔高およそ500m～900mの区域内においてアカガシの優占する群落が部分的発達する。谷沿いの湿度の高い立地ではまだ下降する傾向がある。高木層はアカガシのほかにイスノキ、スダジイ、タブノキ、マテバシイ、ヤブニッケイ、ヤブツバキなどの優占度が高く、低木層はシキミ、アオキ、イズセンリョウ、ネズミモチ、イヌガシなどが多く生育している。草本層にはコバノカナワラビ、ハナミョウガ、フユイチゴ、ノコギリシダ、アリドオシなどの常在度が高い。黒島においては草本層にハランが極めて優占的に生育していて特徴的である。

16, イヌツゲーハイノキ群落 欠

17, スギ天然林

(相観) 常緑針葉樹の高木林

スギ天然林は鹿児島県においては屋久島のみに自生しており、ヤクスギの名で知られている。垂直分布的には海拔高約650m～1850mまでの広い範囲にわたって自生している。また、谷間の湿潤な立地から乾燥した尾根や山頂付近まで分布している。したがって、中腹部ではアカガシ、ウラジログシ、イスノキなどの常緑広葉樹類と混生林を成しているが、尾根部や高地部ではモミ、ツガなどの針葉樹や落葉広葉樹類と混生して入る。

屋久島のスギ天然林について宮脇昭らは海拔高約1200m以上の高地に発達するヒメヒサカキ～スギ群集と海拔高約700m～1200mの範囲発達するタカサゴシダ～スギ群集に大きく区分しているが、ここではヤクスギ天然林として同一凡例で表した。ヒメヒサカキ～スギ群集はスギの他に高木層にはヤマグルマ、ヒメシャラ、ハリギリ、モミ、ツガなどを混生し、亜高木層および低木層にはヒメヒサカキ、アセビ、ヤクシマシャクナゲ、ハイノキ、サクラツツジ、シキミ、ツゲ、ソヨゴなどの常緑広葉樹類やナナカマド、リョウブ、オオカメノキ、ヤマボウシ、アクシバモドキ、タンナサワフタギ、コハウチワカエデなどの落葉樹類の常在度が高く生育している。タカサゴシダ～スギ群集にはこれらの多くの種群を欠くとともに、イスノキ、ウラジログシ、バリバリノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、ヒサカキ、サカキ、マンリョウなどの常緑広葉樹類を多く含んでいる。これらの種群はサカキ～ウラジログシ群団の標徴種群と同じものであり、同一群団に属するものと考えられる。

18, アラカシ群落

(相観) 常緑広葉樹の高木林

アラカシ群落は河川沿いの急傾斜地や岩崖地、溪谷沿い、河岸段丘地等に発達する代償性の高い群落である。高木層はアラカシ、スダジイ、ナナメノキ、ヒメユズリハ、ハゼノキ、エゴノキなどの優占度が高く、亜高木層にはタイミンタチバナ、ヤブツバキ、ミミズバイ、ヒサカキ、ネズミモチ、クチナシ、ハクサンボクなどの常在度が高い。草本層にはコバノカナワラビ、イタチシダ、アマクサシダ、コゴメスゲ、ツワブキなどが生育しているが、高木層や亜高木層がうっ蒼と茂っていることが多く、発達状態はあまり良く無い。また、アラカシ群落は広い面積を占めていることは少なく、帯状に小群落をなしていることが多い。

19, アマミアラカシ群落 欠

20, マテバシイ群落

(相観) 常緑広葉樹の高木林

沿海地のやや乾燥した立地には部分的にマテバシイの優占度の高い群落が発達している。乾性的な立地のため群落の構成種数も少なく、やや単純である。高木層はマテバシイ、スダジイ、イスノキ、タブノキ、ヤブニッケイなどの優占度が高く、亜高木層や低木層にはヤブツバキ、ヒサカキ、イヌガシ、ネズミモチ、イズセンリョウ、クロキ、アオキ、シキミなどが常在的に生育している。草本層はコバノカナワラビ、ハナミョウガ、カツムウイノデ、アリドウシなどがみられるが、発達状態はあまり良好ではない。

21, イチイガシ群落

(相観) 常緑広葉樹の高木林

イチイガシ群落は河川沿いの砂れき地、河岸段丘地などにみられるが規模は小さい。高木層はイチイガシの優占度が高く、コジイ、スダジイ、タブノキ、アラカシ、コバンモチなどが混生している。また、内陸地では、イチイガシが純群落状に発達した群落を見ることもできる。亜高木層や低木層にはヤブツバキ、アオキ、ヤツデ、ミヤマシキミ、サザンカ、ルリミノキ、ヒサカキ、タイミンタチバナ、ネズミモチなどが生育している。草本層にヤブコウジ、ベニシダ、コバノカナワラビ、フユイチゴ、テイカカズラ、ミゾシダ、ハナミョウガ、ヘラシダなどが生育している。川内地方のイチイガシ林にはハナガガシがみられ、特徴的である。

22, サカキ〜コジイ群集

(相観) 常緑広葉樹の高木林

サカキ〜コジイ群集は内陸地の丘陵地や山地斜面に発達する群落で、県北部地方や中部地方の内陸部で部分的にみられる。群落の種組成上からはスダジイを主とする群落と明らかな区別は困難で、その内陸型とみなされる。したがって、群落の組成はやや単純である。高木層はコジイのほかにアラカシ、イスノキ、タブノキ、イチイガシなどで構成されているが、コジイの優占度が極めて高い。また、スダジイの混生する群落もある。亜高木層や低木層にはヤブツバキ、サザンカ、クロキ、クチナシ、ネズミモチ、イヌガシ、サカキ、ヒサカキ、ミミズバイ、タイミンタチバナ、イズセンリョウ、リンボクなどが主な群落構成種となっており、草本層にはホソバカナワラビ、コバノカナワラビ、エイカカズラ、ヤブコウジ、ベニシダなどが常在的に生育している。

23. スダジイ群落

（相観） 常緑広葉樹の高木林、亜高木林

ミミズバイ〜スダジイ群集やヤクシマアジサイ〜スダジイ群集などに含まれなかったシイ林群落、環境庁の植生凡例一覧表に掲載されてない群集名や群落名、あるいは新しい凡例を設けるについては尚検討の要ありと判断したものなどについてはスダジイ群落に含めた。

群落の構成種として高木層にはスダジイ、タウノキ、アラカシ、イスノキ、カクレミノ、コバンモチなどがあげられ、亜高木層や低木層にはタイミンタチバナ、イヌガシ、サカキ、イズセンリョウ、クチナシ、サザンカ、ハクサンボク、ネズミモチその他多くの種類みられ、草本層もコバノカナワラビ、マルバベニシダ、ヤブコウジ、アリドウシその他群落の構成種群は極めて豊富である。

川内地方のスダジイ群落にはハナガシが常在的に認められるのは特徴的である。宇治群島や黒島のスダジイ群落ではハランが極めて優占的に生育しているのは興味深い。即ち、中国渡来とされるハランがこれらの島には自生しているばかりでなく、森林群落の主要構成種となっているのである。

屋久島のスダジイ林についてはヤクシマアジサイ〜スダジイ群落の他に宮脇昭らはギョクシンカ〜スダジイ群集を報告している。これはヤクシマアジサイ〜スダジイ群集の二次林的性格のものとして区分されたものである。それによると、クチナシ、サツマサンキライ、シマイズセンリョウ、クロキ、シロダモ、ツワブキ、オガタマノキなどを区分種としてまとめたものである。トカラ列島のものについては一応スダジイ群落としておいて改めて検討することにした。

23-1, ヤクシマアジサイースダジイ群集

(相観) 常緑広葉樹の高木林

屋久島のスダジイ林を代表するのがヤクシマアジサイースダジイ群集である。ヤクシマアジサイ、トクサラン、リュウキュウルリミノキ、ヤマヒハツを標徴種とし、海拔高約600mまでの範囲に分布している。高木層はスダジイの他にフカノキ、タブノキ、カクレミノ、イスノキ、コバンモチなどが多く、樹高は15~25mにも達する。亜高木層や低木層にはサクラツツジ、リュウキュウルリミノキ、ヤクシマアジサイ、ボチョウジ、シシアクチ、モクタチバナ、ヤマヒハツ、ミミズバイ、アデク、ヤブツバキ、イヌガシ、センリョウ、マンリョウその他種数も豊富である。草本層はヨゴレイタチシダ、オニクラマゴケ、ベニシダ、ミヤマノコギリシダ、タカサゴキジノオ、エダウチホンゲウシダ、コバノカナワラビ、ヤクカナワラビ、ヘゴ、ヘッカシダなどのシダ類が豊富で特徴的である。その他アオノクマタケラン、トクサラン、ツルラン、ユウコ克蘭、サンショウソウ、サツマイナモリ、ミヤマウズラなどが下層に生育しており、群落構成種数は46~70種にも及んでいる。

24, ミミズバイースダジイ群集

(相観) 常緑広葉樹の高木林

鹿児島県本土の低山地から海拔高約450mの範囲に発達するスダジイの極相林はミミズバイースダジイ群集が大部分である。常在度の高い群落構成種として高木層にはスダジイやコジイの他にマテバシイ、タブノキ、コバンモチ、ヤブニッケイなどが見られ、亜高木層や低木層にはヤブツバキ、タイミンタチバナ、ミミズバイ、ハクサンボク、ヒサカキ、クチナシ、カクレミノ、ネズミモチ、イヌガシ、サザンカ、イズセンリョウその他があげられる。草本層にはコバノカナワラビ、ホソバカナワラビ、ヤブコウジ、シュンラン、コ克蘭、アリドウシ、ハナミョウガ、ベニシダ、フユイチゴ、コゴメスゲ、ツルコウジ、テイカカズラ、アマクサシダ、イタチシダなどが生育している。

しかし、内陸地と沿海地や高地と低地、尾根と谷部、傾斜地と平坦地、乾燥地と湿潤など群落の立地によって群落を構成する種類の質的量的に差があることはいうまでもない。また、県の南部と北部でも異なる。甕島などの群落では構成種数が少ないが、乾性的な海洋的気候の影響によるものであろう。

ミミズバイースダジイ群集は低地の適潤地ではタブ群落にあ接続し、高地ではイスウラジロガシ群落に接している。

- 25, リュウキュウアオキースダジイ群集 欠
 26, アマミテンナンショウスダジイ群集 欠
 27, ケハダルリミノキースダジイ群集 欠
 28, アオバナハイノキースダジイ群集 欠
 29, オキナワウラジログシースダジイ群集 欠
 30, タブ群落

(相観) 常緑広葉樹の高木林

海岸の砂丘地や沿海の斜面、丘陵地などのやや乾燥した貧栄養地に発達するタブノキの優占する樹高のあまり高くない群落である。高木層にはタブノキの他にスダジイ、ハゼノキ、ヤブニッケイ、アラカシ、ホルトノキなどがみられる。亜高木層にはヤブツバキ、アラカシ、タイミンタチバナ、モッコク、ハクサンボク、クロキ、ヒサカキ、シャリンバイ、クチナシ、ネズミモチ、ヤマモモなどが生育している。草本層はノシラン、カガメスゲ、ササクサ、ツワブキ、イタチシダ、アマクサシダ、ミゾシダなどが生育しているが貧弱である。また、群落構成種群をみても乾性的なものが多く、このタブ群落を特徴付けている。この群落はまた亜高木状に発達して純群落状をなしていることもある。

31, ムサシアブミータブ群落

(相観) 常緑広木樹の高木林

気候温暖な沿海の平地や低山地の肥沃な適潤地に発達する亜熱帯的色彩の濃い群落である。高木層はタブノキが巨大木に生長しスダジイ、ヤブニッケイ、ホルトノキ、マテバシイなどが混生している。亜高木層や低木層にはショウベンノキ、モクタチバナ、ヤブツバキ、ギョクシンカ、シマイズセンリョウ、サンゴジュ、サザンカ、モクレイシ、ミミズバイ、ボチョウジ、フカノキなどが、また、草本層にはアオノクマタケラン、カツモウイノデ、フトウカズラ、リュウビンタイ、サツマサンキライ、ムサシアブミ、サカキカズラ、オオイワヒトデ、クワズイモなどの暖地性要素が多くみられる。

種子島のタブ群落にはイヌマキが極めて優占的に混入した群落を形成している。尚、一層亜熱帯的色彩の濃くなった群落がアコウやガジュマルが混生している群落である。県本土南端沿海の平地以南の地域で発達している。高木層にはアコウやタブノキなどが巨大木となって茂り、低木層にはモクタチバナやサンゴジュ、ボチョウジなどが極めて優占的に生育している。草本層はクワズイモ、アオノクマタケラン、フトウカズラの他にオ

オイワヒトデ、カツモウイノデ、イシカグマ、コバノカナワラビ、オオタニワタリなどのシダ植物が多い。トカラ列島などの諸島ではビロウが常在的に、高い優占率で生育している群落がある。

3 2, クスノキ群落

(相観) 常緑広葉樹の高木林

かつては植林されたものとおもわれるが巨大木に生長しているのでとりあげた。高木層はクスノキ他にスダジイ、バクチノキなどが生育してお理、樹高は22mにも達している。亜高木層や低木層にはヤブツバキ、サカキ、ミミズバイ、タイミンタチバナ、イヌガシ、ネズミモチ、イズセンリョウ、イスノキ、ウラジログシ、ハクサンボク、ヤツデ、アオキなどが生育している。草本層にはコバノカナワラビ、オオイワヒトデ、カツモウイノデ、オリズルシダ、コクモウクジャクなどのシダ植物やフウトウカズラ、ムサシアブミ、ヤブラン、フユイチゴ、イナモリソウなどの植物が生育している。クスノキが常緑広葉樹林内に生育しているが、優占してクスノキ群落として発達していることはあまり無い。

3 3, ホソバタブ群落 欠

(相観) 常緑広葉樹の高木林

屋久島では溪谷沿いの岩れき地に土砂の堆積したようなところに巨大に成長したホソバタブの群落が発達しているのが局部的に認められるが、群落の規模が小さいので図示できなかった。

3 4, ウバメガシ群落

(相観) 常緑硬葉樹の亜高木林または低木林

種子島や甌島、トカラ列島などの島々の沿海風衝地に発達する群落である。ウバメガシが亜高木まで生長して密生しているので下層の発達は極めて悪い。群落は3層から成り立っており、第1層はウバメガシの他のはタイミンタチバナ、シャシャンボ、ハゼノキ、タブノキ、マサキ、イヌビワなどが僅かに混生しているにすぎない。草本層もノシラン、キキョウラン、ツワブキ、コゴメスゲ、オニヤブソテツなどが僅かにみられるに過ぎない。

ウバメガシ群落と全く同じような立地に発達するマルバニッケイ群落もこの凡例に包含されている。第1層はマルバニッケイが極めて優占的に密生していて、モクタチバナ、トベラ、ハマビワ、ハマヒサカキ、シャリンバイ、マサキなどが点的に生育しているに過ぎない。低木層は極めて貧弱である。草本層はオニヤブソテツ、ツワブキ、ホソバワダン、カタバミ、オニタビラコ、ハマアオスゲなどが常在的にみられる。

35、ウバメガシートベラ群集

(相観) 常緑硬葉樹の亜高木林または低木林

ウバメガシ群落やマルバニッケイ群落などを主とする海岸風衝低木林は種子島、屋久島、甌島、トカラ列島の島々に良く発達している。常に海からの強い風に晒されているのでマッキー状になっている。極めて乾性的な海岸風衝の崖地や岩れき地に発達する群落のため、群落の組成は極めて貧弱である。上層はウバメガシ、シャリンバイ、トベラ、ネズミモチ、クロキ、マルバグミ、ヤマモモ、タイミンタチバナなどで占められており、下層はツワブキ、タマシダ、コバノタツナミソウ、キキョウラン、ハチジョウススキなどが生育している

種子島ではクロマツが高木層を占めている一見クロマツ林のように見えるウバメガシ群落が発達している。クロマツの植被率は低く、群落の組成も単純で貧弱である。

36、マサキートベラ群集

(相観) 常緑広葉樹の低木林

沿海地や島しょの海岸風衝の岩崖地や急斜面、岩れき地などに発達する風衝低木林である。群落の構成は上層はマサキ、トベラの他にシャリンバイ、ハマビワ、モクタチバナ、ツルグミ、ハマヒサカキ、ハマサウトリイバラなどの種群からなっており、下層はハチジョウススキ、キキョウラン、オニヤブソテツ、ホソバワダン、タチツボスミレなどによってできている。また、テリハノイバラやノブドウ、クズなども混入してマント状となっていることもある。極めて厳しい条件下に発達する群落なので構成種数も少なく、生育状況も良くない。

37、オニヤブソテツーハマビワ群集

(相観) 常緑広葉樹の亜高木林または低木林

マサキートベラ群集よりやや安定した立地に発達する群落である。土壌条件もやや良いので群落を構成する種類も多く、第一層は亜高木状に発達していることが多い。第1層はハマビワノ他にタブノキ、ハゼノキ、アカメガシワ、マサキ、トベラ、クロキ、ナンバンキブシ、ノブドウ、ナワシログミ、ハマサルトリイバラ、ヘクソカズラ、ハマヒサカキなどの常在度が高く、下層にはオニヤブソテツ、フウトウカズラ、ツワブキ、キキョウラン、コゴメスゲ、アオノクマタケラン、ホラシノブ、エダウチチジミザサなどが生育している。

38、アカテツーハマビワ群集 欠

39、アカマツ群落 欠

40、クロマツ群落

(相観) 常緑針葉樹の高木林

クロマツ群落は沿海の風衝地、砂地、れき地、傾斜地などに発達している。高木層はクロマツの優占度が高く、アラカシ、ハゼノキ、タブノキなどが生育している。亜高木層や低木層にはシャリンバイ、トベラ、ハマヒサカキ、タイミンタチバナ、ハマビワ、ウラジロフジウツギ、テリハノイバラ、テリハツルウメモドキ、アカメガシワ、イヌビワなどの先駆的落葉広葉樹や硬葉樹を主とする樹種が多い。草本層にはツワブキ、タマシダ、キキョウラン、オイランアザミ、ホウロクイチゴ、ススキ、ツルソバ、ツボクサなどが生育している。

集落や耕作地の前面の砂丘地やれき状地に発達している群落では補植したり植林したのもあるが、種組成的に区別することは難しい。また、群落を形成しているクロマツの樹齢によって群落の種組成は異なる。

41、河辺ヤナギ低木林群落

(夏緑広葉樹の亜高木林または低木林)

川岸や湖岸、沼地や湿地などに発達するヤナギ群落である。第1層はヤナギ1種のことが多い。薩摩郡いむた池は沼地で第1層はジャヤナギの散開した疎林で、下層荷はマコモ、ヨシ、カサスゲ、シロバナサクラタデ、ミズオトギリなどが生えている。

42、ソテツ群落

(常緑のソテツ低木林)

海岸風衝の岩崖地や岩地などの極めて厳しい条件下に発達している常緑の低木林である。上層はソテツの他にハチジョウススキ、ハマビワ、イヌビワ、シャリンバイ、マサキなどが生育している。下層にはオニヤブソテツ、イシカグマ、アオノクマタケラン、ノシラン、ツルソバ、カタバミ、コゴメスゲなどがはえている。

ソテツは琉球列島から九州南部まで分布している植物である。しかし、トカラ列島にはその自生らしいものはみられない。

43、ビロウ群落

(相観) 常緑ヤシ状の高木林

沿海の急傾斜地や岩崖地などに第1層のビロウが樹高が20m以上にも伸びて突出した疎林を形成しているのをみることが多い。また、トカラ列島の宝島では砂丘地に亜高木状に生長した純群落状に発達した群落をみることができる。樹高が20m以上にも生長した群落の下層の組成はタブ群落やモクタチバナ群落の組成と極めて類似している。亜高木層にはモクタ

チバナやタブノキ、ショウベンノキなどの優占度が極めて高く、低木層はヤブツバキ、モクタチバナ、ショウベンノキ、サンゴジュ、ボチョウジ、ギョクゼンカ、サツマサンキライなど、草本層はカツモウイノデ、フウトウカズラ、オオイワヒトデ、ハチジョウシダ、ムサシアブミ、テイカカズラ、クワズイモ、コバノカナワラビなどが常在的に優占している。また、ビロウが純群落状に発達した亜高木林ではビロウが密生していて下層は極めて貧弱になっている。

44、ナガミボチョウジークスノハカエデ群落 欠

45、マングロウ群落

（相観） 常緑広葉樹の低木林

屋久島の栗生海岸と種子島の熊野海岸、湊海岸に自生している。上層はメヒルギが純群落となっていることが多いが、熊野の群落ではハマジンチョウ混生しており、また、ハマボウなどの混生もみられる。下層にはメヒルギの稚樹の他にシオクグやソナレシバ、セイコノヨシ、シチトウなどの生育していることもある。

マングロウ群落はいずれもメヒルギ一種しか分布しておらず、河口付近の泥湿地で海水が定期的に侵入する環境に発達する特殊な植物群落で、自然分布の北限帯となっている。

46、ガジュマルークロヨナ群落 欠

47、サガリバナサキシマスホウ群落 欠

48、リュウキュウマツ群落

（相観） 常緑針葉樹の高木林

代償植生として発達するリュウキュウマツ群落はその立地の潜在植生を反映した群落構成をしている。従って、海岸近くでは硬葉低木林の、タブ林やシイ林域ではそれらの群落構成種で構成されている。タブ林域においては亜高木層や低木層はタブノキ、ヤブニッケイ、モクタチバナ、イヌビワ、キンショクダモ、リュウキュウテイカカズラ、トカラアジサイ、リュウキュウチクなどの優占度が高く、草本層はアオノクマタケラン、カツモウイノデ、タマシダなどが生育している。

49、コナラ群落

（相観） 夏緑広葉樹の高木林

コナラ林やクヌギ林などの夏緑広葉樹林は内陸の丘陵地や傾斜地帯に小規模の群落が発達している。コナラやクヌギの優占する群落で、ハゼノキ、ガマズミ、アラカシ、ハクサンボク、サルトリイバラ、イヌビワ、アカメガシワなどの夏緑広葉樹などが生育し、下層にはススキ、マルバハギ、ワ

ラビ、サルトリイバラ、フユイチゴ、ササクサ、チジミザサ、シラヤマギクなどがみられる。

50、シイ・カシ萌芽林

(相観) 常緑広葉樹の高木林や亜高木林

伐採や火入れ後にはったつする二次林で、シイやカシのいが極めて優占的に出現するのあれば、夏緑広葉樹類の優占率の高いものもある。出現率のたかい樹木類にはスダジイ、アラカシ、ヤブニッケイ、タブノキ、ヒサカキ、イヌガシ、イズセンリョウ、クロキ、サザンカ、モチノキ、モチノキ、ヤマモモ、タイミンタチバナ、ヤブツバキなどの常緑広葉樹類とアカメガシワ、カラスザンショウ、イヌビワ、ムラサキシキブ、エゴノキ、ハマクサギ、カンコノキ、アオモジなどの夏緑広葉樹類及びヤマノイモ、モミジドコロ、キダチニンドウ、サルトリイバラ、ナツズタなどの蔓植物などがある。また、イスノキーウラジログシ群落やアカガシ群落の発達する高地ではイスノキ、ウラジログシの他にユズリハ、イヌガシ、ハイノキ、サカキ、サクラツツジ、ミヤマシキミ、アカガシなどの常緑広葉樹類やハリギリ、ナナカマド、ヒメシャラ、イワガラミ、リョウブ、ヤマグルマ、アカシデなどの夏緑広葉樹類等によって構成されているのが屋久島ではみられる。

51、ハクサンボクーマテバシイ群落

(相観) 常緑広葉樹の高木林または亜高木林

沿海地から内陸の丘陵地や斜面に広い地域に亘って発達している群落である。高木層や亜高木層はマテバシイの優占する率が極めて高く、純群落状を呈する林分もある。その他、スダジイ、アラカシ、ヤブニッケイ、タブノキ、ヒメユズリハなどが常在的に認められる。低木層にはヤブツバキ、サザンカ、ヒサカキ、ネズミモチ、クチナシ、イヌビワ、クロキ、ハクサンボク、モッコク、ムラサキシキブなどの常在度が高い。かつては薪炭材として広く植栽された林分も大いが群落の組成上から区別することは困難である。草本層にはヤブラン、ツワブキ、ノシラン、ハナミョウガ、シュンラン、ヤブコウジ、アマクサシダ、テイカカズラのどが生育している。

52、伐跡群落

(相観) 禾本高茎草本群落

森林伐採跡地や山火事跡地などに発達するススキを優占種とする群落である。スギやヒノキなどが植林されてまだ一年に満たないようなものもある。クマイチゴ、ハウロクイチゴ、ナガバノモミジイチゴなどのイチゴ類やベニバナボロギク、ヤクシソウ、アキノノゲシ、チジミザサなどが混生

している。また、アカメガシワ、クサギ、カラスザンショウ、アオモジ、イヌビワ、イヌザンショウなその先駆的夏緑広葉樹叢やタブノキ、モッコク、イヌガシ、ヒサカキ、ネズミモチ、アキグミ、アラカシなどの常緑広葉樹類及びサルトリイバラ、ノイバラ、ノブドウ、クズ、ヘクソカズラ、ツタなどの蔓性植物も多い。

5 3、ベニバナボロギク・ダンドボロギク群落

（相観） 一年生の草本群落

皆伐した直後や火入れ直後の跡地に発達する一年生の草本植物群落である。ベニバナボロギクやタンドボロギクの優占率が極めて高い群落である。群落内にはススキ、オオアレチノギク、ヤクシソウ、イゲシ、オトコヘシ、アキノノゲシなどの一年生植物やツカラスザンショウ、イヌザンショウ、ネムノキ、ハゼノキ、キブシ、エビズルなどの夏緑広葉樹類やクロガネモチ、ヤマビワ、ネズミモチ、アラカシなどの常緑広葉樹類の稚樹の見られる群落もあり、やがてこれらの種群を主とする群落に移行するかと予想される。

5 4、ササ・タケ群落

（相観） 常緑のササ・タケ状低木林または亜高木林

メダケ群落やハウライチク群落などがある。丘陵地や山の斜面などで、絶えず伐採や火入れなどで群落のはかいが繰り返されて貧栄養化した土壌条件のもとではササ・タケ群落が発達する。また、耕作放棄後の跡地もそのまま放置しておくともササ・タケ群落となることがある。

メダケ群落は極めて密生するため他植物の侵入は極めて少ない。アカメガシワ、ネズミモチ、ナワシログミ、アラカシ、ヤマノイモ、カラスウリ、マルバドコロ、ヘクソカズラなどが点在しているにすぎない。下層にはホシダ、ツワブキ、ヤブコウジ、テイカカズラ、フユイチゴなどが辛うじて生育している。ハウライチク群落も密生すると同じ林相になるが、空域が出来るとその立地に相応した木本類が侵入してくる。

黒島の最高地点海拔610m付近にはスズタケ群落が発達している。群落内にはアカガシ、シキミ、ヤブツバキ、ナズミモチ、マルバサツキ、シャリンバイ、ヒサカキ、ヒロハハイノキ、ツクシイヌツゲなどの木本類やハラン、ノシラン、ツルコウジなどが生育している。

5 5、ダンチク群落

（相観） 常緑のタケ状亜高木林または低木林

海岸の岩崖地や溪流沿いに発達するが、群落の規模が小さくて群落の構造等については明らかではない。屋久島の安房で調査された群落について

はオオムラサキシキブ、ゲットウの他にテリハノブドウ、ノアサガオ、ツルソバ、フウトウカズラなどの蔓性植物やハイキビなどが生育しているのがみられる。

56、リュウキュウチク群落

(相観) 常緑のササ・タケ状の低木林または亜高木林

鹿児島県南端部以南の地に分布するササ・タケ状の群落である。特にトカラ列島では低地から山地に至る広い空域を占めて著しく発達し、島全体がリュウキュウチク林で覆われているようになっているところもある。土地条件の良い腐植質の多い緩傾斜地等では亜高木状に発達しているが、風衝地や荒廃地等では低木状に発達している。竿が立錐の余地もない程に密生していることが多く、他種の混入は極めて少ない。そのような林分では下層の植物相の発達も良くない。

沿海風衝地ではマルバニッケイ、ハマヒサカキ、トベラ、アカメガシワ、オオムラサキシキブ、ハマビワなどが混生している。下層にはイシカグマ、オニヤブソテツ、ツワブキ、ホシダ、フウトウカズラ、テイカカズラなど僅かの種類のも；のが辛うじて生育しているにすぎない。

57、ススキ群団

(相観) 多年生の高茎草地群落

定期的に火入れをされる採草地や放牧地、山林伐採跡地、耕作放棄地などに発達している群落である。ススキ草原内に常在的に生育している主な種群としてテリハノイバラ、ナワシロイチゴ、イヌガンピ、リンドウ、アキノキリンソウ、メドハギ、カワラマツバ、オミナエシ、オトコヘシ、カルカヤ、ネコハギ、オカトラノオ、オトギリソウ、ワラビ、コマツナギ、ツリガネニンジン、サルトリイバラ、シシウドなどがある。

鹿児島県南部以南ではハチジョウススキ群落がススキ群落と置き換わって発達している。特に沿海地の斜面、耕作放棄地、風衝の原野などに発達している。

58、チガヤーススキ群落

(相観) 多年生の草本植物群落

絶えず刈り取られる採草地、定期的に火入れの行われる放牧地、耕作放棄地などにチガヤが極めて優占的に生育した群落がある。チガヤの優占度が高く、純群落状をしていることが多い。群落内にはススキ、ヨモギ、イヌガンピ、ワラビ、ヒメハギ、スミレ、ヘビイチゴなどが極めて低い被度で生育しているに過ぎない。沿海の砂丘地ではテリハノイバラ、ヘクソカズラ、ホソバワダン、ゲンバイヒルガオやその他の砂丘地植物群落構成種

群が混入してくる。

59、シバ群団

（相観） 多年性のシバ状群落

絶えず刈り取りをして高茎草本植物のはえない牧草地や放牧地、家畜が踏み荒らして裸地化しつつあるところなどに発達する。また、路傍、畦などにもみられるが、いずれも小規模で図示出来ない。群落内にはカタバミ、チドメグサ、ニシキソウ、ネズミノオ、オヒシバなどが生育しているのを見ることができる。

60、ハイキビ群落

（相観） 多年性の草本植物群落

ハイキビは海岸の砂丘地から路傍、田畑の畦畔、畑地、水湿地や水田放棄地などに広く分布して群落を作っている。したがって、砂丘地ではゲンバイヒルガオ矢ハマゴウ、ハマグルマナドと、水湿地ではチゴザサ、カモノハシ、フトイ、シロバナノサクラタデなどと群落を構成している。また、路傍ではヨモギ、ヨメナ、チドメグサ、ハウキギク、スズメノエンドウその他多くの路傍雑草植物と結び付いて群落を作っている。

61、路傍雑草植物群落

（相観） 多年性の草本植物群落

道路沿い、人家付近の空き地、田畑の畦道などに帯状に発達する雑草群落である。群落の成立する土地の状態、場所、人の干渉の程度等によって多様な植生が発達している。主なものをあげると、ヨモギ、ヨメナ、オオアレチノギク、スギナ、ハコベ、ノビル、スズメノヤリ、ネズミノオ、チカラシバ、オヒシバ、メヒシバ、オドリコソウ、カラムシ、チドメグサ、ツルソバ、ムラサキカタバミ、ムラサキケマン、トウバナ、キツネノマゴ、エノコログサ、スイバその他多数の植物があげられる。主な群落にはネズミノオ群落、チカラシバ群落オオバコ群落、オドリコソウ群落、カラムシ群落、クローバー群落、ヨモギ群落などがある。

62、セイダカアワダチソウ群落

（相観） 一年性高茎の草本植物群落

河原の空き地、住宅地周辺の空き地、耕作放棄地などの裸地に発達する帰化雑草植物群落の一つである。よく繁殖して密生し、純群落状を呈していることが多い。群落内にはオオアレチノギク、オオハウキギク、ヘクソカズラ、ヒメクズ、アシボソ、コブナグサ、キツネノマゴ、ヨモギ、ヨメナなどが生育しているのがみられる。

63、ヨモギ群 欠

(相観) 草本植物群落

路傍雑草植物群落の代表的群落の一つである。田畑の畦、土手、岸辺、路傍に普通にみられる。群落内にはヨメナ、ミミナグサ、カタバミ、ハコベ、トウバナ、チドメグサなどがみられる。

64、アカマツ群落 欠

(相観) 常緑針葉樹の高木林

65、クロマツ群落

(相観) 常緑針葉樹の高木林

海岸砂丘地や岩崖地、丘陵地などに発達する先駆的植生である。クロマツ群落は自然植生でも代償植生でも植林でも群落組成上、区別することは難しい。沿海地では亜高木層や低木層にはタブノキ、アラカシ、ハリエンジュ、クロキ、サンゴジュ、ネズミモチ、ハマヒサカキ、マサキ、アカメガシワ、アキグミ、ナツズタ、サルトリイバラ、テリハツルウメモドキ、ヘクソカズラなどが常在的にみられ、草本層にはタマシダ、フウトウカズラ、イタチシダ、ホシダ、ササクサ、チジミザサ、ススキなどが生育している。

66、クズ群落(林縁性つる一低木群落)

(相観) 蔓性植物の低木林

沿海地から原野や山地樹林のマント群落として発達する群落である。普通蔓性低木林であるが、亜高木状に発達している群落もある。クズの他にテイカカズラ、アケビ、ノイバラ、カラスウリ、ヤマフジ、ビナンカズラ、ヘクソカズラなどの蔓性植物やアカメガシワ、ハゼノキ、アラカシ、イヌビワ、ガマスミ、ハウロクイチゴ、タブノキ、チジミザサ、ヤブラン、ハナショウガ、ホシダ、シュンランなどが生育している。また、ノイバラ、サルトリイバラ、ハウロクイチゴ、ナガバノキイチゴなどと共にマント群落をつくっていることもある。

67、ヨシクラス(低層湿原)

(相観) ササ・タケ状の高茎草本植物群落

池沼や河辺などの泥湿地、海辺の沼地などに生える高茎の草本植物である。普通、ヨシまたはセイコノヨシが純群落を形成している。いむた池ではマコモ、ヒメガマ、カンガレイ、シロバナサクラタデ、カサスゲ、ナガバノウナギツカミ、チゴザサなどが生育している。また、ジャヤナギと低木層を形成し下層にチジミザサ、ハイキビ、ハウキギク、ヤナギタデなどの生育している群落もある。

マコモ群落、シチトウイ群落、アンペライ群落、ヒメガマ群落、フトイ群落、ヒトモトススキ群落なども同じような環境の下で発達する群落で、他植物の生育はなく純群落状を呈していることが多い。中之島の底無池のヒトモトススキ群落は広大である。

68、ウキクサクラス・ヨシクラス

（相観） 浮葉・沈水草本植物群落

池や沼、人工的な止水域、川のだまり、湿田などに発達する浮葉・沈水性の植物群落である。川内市寄田のオニバスーヒシ群落は一年生の浮葉植物で夏季に浮葉を水面に広げる。鹿児島県の天然記念物に指定されて保護されている。ヒシの純群落も各地の池沼に発達している。ヒルムシロやヤナギモ、ホザキノフサモ、クロモ、エビモなどと共に群落を構成したり、純群落を作ったりしている。

69、塩沼地植生

（相観） 低茎シバ状の草本植物群落

海水や汽水が潮の干満や季節等によって定期的に浸かる河口付近の泥湿地や砂泥地などに発達するオニシバやナガミノオニシバなどの群落である。純群落をなしていることもあるが、ハイキビ、ギョウギシバ、ハママツナなどが生育していることもある。

70、シオクグ群落

（相観） シバ状の草本植物群落

潮沼地植生の一つで、海水が潮の干満や季節等によって定期的に浸かる河口付近の泥湿地や砂泥地に発達する群落である。泥湿地や沼地では純群落を作ることが多いが、砂泥地ではナガミノオニシバ、ハマアカザ、ツルナ、ギシギシ、ハマヒルガオ、ハママツナなどが生育している。屋久島の栗生ではヨシやカモノハシが混生している。

71、ハマボウ群落

（相観） 夏緑広葉樹の低木林または亜高木林

河辺や河口付近の泥湿地、マングローブ林の縁辺部等に発達していることが多いが、海岸砂丘地の後背地に発達することもある。塩生地低木林の一つで、塩水に浸かるようなところでは純群落状に発達している。また、あまり塩水の影響を受けないところではイヌビワ、モクタチバナ、ネズミモチ、トベラ、マサキ、ハマビワなどの木本類やノアサガオ、ハスノハカズラ、スイカズラ、サツマサンキライなどの蔓植物及びフウトウカズラ、キズタ、クサスギカズラ、ゲットウ、ツユクサ、ハマオモトなどの生育している群落もある。

7 2、砂丘植生

(相観) 海岸砂丘地の草本植物群落

海岸の潮風の影響を強く受け、砂の動きの激しい砂丘という特殊な環境に発達する群落を包括している。砂泥質の所から砂質、れき質の所などによっても、また、汀線からの距離によっても成立する群落に相異がある。この砂丘植生に包含される群落にはハマヒルガオ群落、グンバイハルガオ群落、ハマグルマ群落、キダチハマグルマ群落、ハマゴウ群落、スナズル群落、ツルナ群落、コウボウムギ群落、ナガミノオニシバ群落、クロイワザサ群落、コウボウシバ群落、ギョウギシバ群落、ケカモノハシ群落その他多様である。

7 3、ハマグルマ-コウボウムギ群集

(相観) 海岸砂丘地の草本植物群落

ハマグルマやコウボウムギの優占する群落で、吹上浜などでは広大な群落が発達している。群落内にはハマグルマやコウボウムギの他にハマヒルガオ、ハマゴウ、ハマボウフウ、ハマニガナ、コマツヨイグサ、ビロウドテンツキ、ナガミノオニシバなどで群落が形成されている。

7 4、ハマグルマ-ハマゴウ群集

(相観) 海岸砂丘地の草本植物群落

ほふく性の木本植物であるハマゴウやハマグルマの優占する群落で、ハマグルマ-コウボウムギ群落と共に砂丘地植生を代表する群落である。群落内にはハマボウフウ、ハマニガナ、ビロウドテンツキ、コマツヨイグサ、チガヤ、ナガミノオニシバ、ハマヒルガオ、アレチノギクなどが優占的に生育している。吹上浜をはじめ県下各地に広く分布している。

7 5、グンバイヒルガオ-クロイワザサ群落

(相観) 海岸砂丘地のほふく性の草本植物群落

グンバイヒルガオは鹿児島県南部の海岸砂丘まで分布する熱帯・亜熱帯性の代表的植物である。クロイワザサは中之島以南に分布する植物である。中之島ではグンバイヒルガオ-ハマゴウ優占群落となっており、ハマヒルガオやハマボウフウ、ハマグルマなどが生育しているが、クロイワザサは欠如している。宝島の砂丘ではグンバイヒルガオ-クロイワザサ群落をみることができる。

7 6、ツキイゲ群落

(相観) 海岸砂丘地の禾本草本植物群落

ツキイゲはグンバイヒルガオと共に、熱帯・亜熱帯の海岸砂丘植物の代表的植物の一つで、屋久島を経て種子島まで分布している。宝島ではクロ

イワザサ、シマネナシカズラなどと群落を作っている。また、分布の北限のハウチワノキの小低木を含む群落も見られる。屋久島の自生地ものは群落が小規模で貧弱である。種子島ではネコノシタやヒメハマナデシコ、コウボウシバ、ハイキビその他と群落を形成しており、分布の北限となっている。

77、ハチジョウススキ群落

(相観) 禾本高茎草本植物群落

海岸の岩崖地や岩上に発達する岩地荒原植生として取り扱われるものを包括してハチジョウススキ群落としている。主な群落構成種としてハチジョウススキ、ボタンボウフウ、オニヤブソテツ、オニヤブマオ、ノジギク、キキョウラン、ハマホラシノブ、ホソバワダンなどがあげられる。屋久島の永田ではハチジョウススキ、ノジギク、ハマサルトリイバラ、ウラジロフジウツギ、ツワブキ、ホソバワダンなどが優占する群落が発達している。

78、ノジギク群落

(相観) 海岸岩地の草本植物群落

ハチジョウススキ群落と同様に海岸の岩崖地や急斜面、砂れき地などに発達するノジギク、ハチジョウススキを主とする群落である。ホソバワダン、オニヤブソテツ、キキョウラン、オニヤブマオ、ボタンボウフウ、スゲ類などを主な群落構成種としている。薩摩半島西海岸ではノジギクがサツマノギクと置き換わっている。また、トカラ列島以南ではオオシマノジギクと置き換わっている。

79、オキナワギク-ハチジョウススキ群集 欠

80、コウライシバ群落

(相観) シバ状の小形草本植物群落

海岸の岩上、隆起サンゴ礁上などに発達するシバ型の植物群落である。岩上という厳しい環境下で耐塩性、耐乾性の強いコウライシバ群落が発達している。群落構成種として特にソナレムグラの優占度が高く、その他ボタンボウフウ、ホソバワダン、ハマボッス、イソヤマテンツキ、シオカゼテンツキ、イソフサギなどが生育している。また、宝島ではリュウキュウコケリンドウが見られ、分布の北限となっている。

81、隆起サンゴ礁植生

(相観) 常緑広葉の散開したわい小低木林または低木林

海岸に縁着している裾礁で常に塩水をかぶる厳しい環境下で発達するわい小低木が散生している群落である。イソマツ群落、ミズガンビ群落、テンノウメ群落などを包含している。

8 2、イソマツモクビャッコウ群集

(相観) 散開したわい小低木群落

陸地に縁着している裾礁の前線帯に発達するぐんらくである。植被率は極めて低くて30%以下である。宝島ではモクビャッコウを欠き、イソマツモクビャッコウ群集しか発達していない。

8 3、クサトベラーモンパノキ群集

(相観) 常緑広葉樹の団塊状低木林

クサトベラやモンパノキを主とする低木群落で、隆起サンゴ礁上ばかりでなく、砂丘の草本植物群落の後方やれき地、岩地などに発達する。群落内にはマサキ、トベラ、ノアサガオ、キダチハマグルマ、ハマオモト、ホソバワダン、ハマボッスなどが見られる。屋久島の栗生の産地は自生の北限帯である。

8 4、アダンオオハマボウ群落

(相観) 常緑高木樹の亜高木林または低木林

砂丘地、岩れき地、隆起サンゴ礁などに発達する草本植物群落の後方の安定した立地にはクサトベラーモンパノキ群落に続いてアダンオオハマボウ群落が発達する。群落内にはアダン、オオハマボウの他にソテツ、シマグワ、リュウキュウチク、ノアサガオ、カラスギバサンキライ、ハマダイコン、ホソバワダン、クロイワザサ、ハマボッス、シマアザミ、スナズル、オニタビラコ、カタバミなどが生育している。低木状に発達している群落ではアダンが極めて密生して踏み入る余地のないこともある。

8 5、火山荒原植生

(相観) コケ状群落や散生する多年生草本植物群落

硫黄島、中之島、諏訪之瀬島などの噴煙を上げている噴火口付近は絶えず噴気や火山砂れき、変動する地表の条件等の影響を受けて植生の発達は極めて制限されている。マルバサツキ、トカライヌツゲ、シャシャンボなどのわい小低木とハチジョウススキやミズスギ、アリノトウグサなど数種が極めて疎らに生育しているに過ぎない。やや安定してくると、マルバサツキを含むススキ草原となる。

8 6、イタドリタマシダ群落

(相観) 散開した草本植物群落

火山荒原植生には包含されるもので、口之永良部島ではイタドリハチジョウススキ群落として宮脇昭らが報告している。桜島などの低地に発達するイタドリタマシダ群落とは同一視することは出来ないが、一応まとめておくことにした。

87、火山性ヤシャブシ群落

(相観) 夏緑広葉樹の亜高木林または低木林

ヤシャブシ群落は諏訪之瀬島の海拔高350m～500mの範囲に発達している。火山性の砂れきの堆積した斜面に低木状または亜高木状に生育している。下層にはマルバサツキ、ヒサカキ、タブノキ、トベラ、ヒメユズリハ、シャリンバイ、トカラアジサイなどが生育しており、草本層にはツワブキ、ミズスギ、イタドリ、ハチジョウススキ、コシダ、ユノミネシダ、ハマホラシノブなどが生育している。

88、クロマツ・ヤシャブシ群落 欠

89、アカマツ植林

(相観) 常緑針葉樹の高木林

アカマツの植林はやや内陸地にみられるのはアカマツの自然分布がやや内陸的なことに起因する。屋久島でも小杉谷付近にアカマツの植林がみられる。高木層にはアカマツの他にオオバヤシャブシやシマウリカエデ、イワガラミ、ナシカズラなどが見られ、低木層にはサクラツツジ、ヒサカキ、ツガ、モミ、カナクギノキ、ハリギリ、リョウブ、ヒメシャラ、ミヤマシキミ、ヤマグルマなどが生育しており、草本層にはフユイチゴ、ベニシダ、サンショウソウ、タカサゴシダ、オオキジノオシダなどが優占的に生育している。

90、クロマツ植林

(相観) 常緑針葉樹の高木林

沿海の山地や平地、海岸地帯に広く植林されている。山地では用材用に植林が進められてきたが、海岸地帯では防風防砂を目的として植林されてきた。特に吹上浜等では長い年月をかけて広大な面積に植林が行われてきた。山地や平地ではスダジイ林やタブ林の群落構成種が下層を占めている。また、海岸地帯ではタブ林群落の構成種の他に沿海硬葉樹種が混入している林分もある。近年、マツクイムシの被害がひどく、松林が荒廃しつつあるのは惜しい。

91、スギ・ヒノキ・サワラ植林

(相観) 常緑針葉樹の高木林

シイ・カシなどの常緑広葉樹林を伐採した跡地にはスギやヒノキなどの針葉樹を植えるのがむしろ当たり前みたいに考えられ、スギやヒノキの植林域が極めて広がった。それはスギやヒノキが経済的に価値が最も高いからである。しかし、自然生態系を無視したやりかたは将来多くの問題をはらむものといえよう。スギ植林もヒノキ植林もその立地の潜在植生を反映

し、下層にはスダジイ群落やタブノキ群落、イスノキーウラジログシ群落などの群落構成種が生育している。

92、リュウキュウマツ植林

(相観) 常緑針葉樹の高木林

リュウキュウマツはたか宝島以南に自生する常緑の針葉樹である。宝島には各地にリュウキュウマツの植林が見られる。群落調査を行った林分について見ると、亜高木層にはタブノキやヤブニッケイの優占度が極めて高く、低木層はタブノキ、リュウキュウチク、キンショクダモ、イヌビワ、モクタチバナ、ヤブニッケイ、ビロウ、ナガミボチョウジ、ギョクシンカ、トカラアジサイなどが生育しており、草本層にはリュウキュウテジカカズラ、アオノクマタケラン、カツモウイノデなどが見られる。また、やや風衝の尾根筋の植林地では下層にウバメガシ、マルバニッケイ、ハマヒサカキ、ヒメユズリハなどの植被率我極めて高く、草本層の発達は極めて貧弱である。

93、モクマオウ植林

(相観) 常緑広葉樹で針葉型の高木林

宝島の砂丘と言われる砂丘地には砂防の目的でモクマオウの植林が年次的に行われている。まだ年数を経っていない低木状のものもあるが、次第に砂漠の広い空域を占めてきつつある。高木林に発達した群落では、下層にアダン、シャリンバイ、シマグワ、ツルグミなどが見られ、草本層にはホソバワダン、ノゲシ、ヘクソカズラ、クロイワザサ、マルバアカザ、ツルモウリンカ、ハマボウス、ヨモギ、カタバミ、コバノヨツバムグラなどが生育している。

94、外国産針葉樹植林

(相観) 常緑針葉樹の高木林

鹿児島県中北部にはアメリカ原産のテーダマツが植栽されている。陽性の丘陵地などで生育状況は良い。下層にはタブノキ、スダジイ、タイミンタチバナ、ハクサンボク、イヌビワ、ヒサカキ、クチナシ、ネズミモチ、イズセンリョウなどの木本類やササクサ、チジミザサ、ノシラン、テイカカズラ、ハナミョウガ、イタチシダ、コバノカナワラビなどの草本類が生育している。

95、クスノキ植林 欠

96、マテバシイ植林

(相観) 常緑広葉樹の高木林

マテバシイをかつては薪炭用として広く植栽していた。したがって、屋

敷林、裏山、村落地付近の山にマテバシイ林が多い。沿海地の二次生のマテバシイ林と群落の組成上の相異はない。植林地のものは一度伐採されているので株立ちしているのが多い。下層にはヒサカキ、アオキ、イヌビワ、ハクサンボク、ヤブツバキ、ネズミモチ、クロキ、クチナシなどの常在度が高く、草本層にはハナミョウガ、シュンラン、テイカカズラ、ミゾシダ、コバノカナワラビ、ツワブキなどが生育している。また、海岸地帯ではマサキ、サンゴジュ、ハマヒサカキ、ギョクシンカなどの常在度が高い。

97、ソウシジュ植林

（相観） 常緑広葉樹の亜高木林または高木林

植林されたソウシジュが各地に生育しているが、群落として取り扱うようなものは見当たらなかった。

98、落葉広葉樹林

（相観） 夏緑広葉樹の亜高木林または低木林

シイタケ栽培の原木としてクヌギの植林が盛んに行われている。内陸地のなだらかな丘陵地・山の斜面に多い。樹林内にはアカメガシワ、サルトリイバラ、ハゼノキ、ヒサカキ、ガマズミ、ハクサンボク、ノイバラ、イヌビワ、アラカシなどが、優占的に生育している。

99、外国産広葉樹植林

（相観） 夏緑広葉樹の高木林または低木林

ポプラ、ニセアカシヤ、ギンネムなどの落葉広葉樹種が各地に生育しているのは見られるが、群落を形成するほどに数多く繁殖しているのはない。

100、竹林

（相観） 大形の常緑性竹林

鹿児島県において最も広い面積を占めて植栽されているモウソウチク林を除く竹林で、マダケ林、タイミンチク林、ハチク林などを包含するが、いずれも小面積に栽培されているに過ぎない。

101、モウソウチク林

（相観） 大形の常緑性竹林

藩制時代に中国南部から移入された巨大なタケで、現在は竹製品の材料として、また、タケノコをとるため広く植栽されている。屋敷林や裏山、山裾などによくうえられているが、林内にはスダジイ、タブノキ、シロダモ、ミミズバイ、アラカシ、ハクサンボク、ヒサカキ、イヌガシ、イズセンリョウ、ネズミモチ、サザンカ、ヤブツバキなどの木本類やホソバカナワラビ、テイカカズラ、コゴメスゲ、ツルコウジ、コ克蘭、ツワブキ、

ハナミョウガ、ノシランなどの草本類が生育している。

102、常緑果樹園

(相観) 常緑広葉樹の亜高木林または低木林

ウンシュウミカン、ボンカン、タンカン、ナツミカン、ハッサクなどの柑橘類の栽培が盛んである。日当たりのよい丘陵地、中腹部や山麓などのスダジイ林やタブノキ林が発達する地帯がよく利用されている。果樹園はイモ類やヤサイ類を栽培する畑のように耕されないで、発達する雑草群落にも多少の相異がある。主な種類をあげると、メヒシバ、ヨモギ、スギナ、ハコベ、チガヤ、オニタビラコ、カモジグサ、オオアレチノギク、ノゲシ、ヨメナ、カタバミ、トウバナ、ヘビイチゴ、キツネノマゴ、クサイチゴ、イノコズチ、クズなどがある。

ビワの栽培も近年盛んになりつつあり、そこに発達する雑草群落もほぼ似ている。また、ウメ、モモ、ブドウ、カキ、クリなどの落葉性広葉の果樹類も小規模ながら栽培されている。

103、茶畑

(相観) 常緑広葉樹の小低木群落

丘陵地帯のやや上部に茶畑はつくられている。鹿児島県はチャの栽培の盛んな所として有名で、栽培面積も広がりつつある。茶畑に広く見られる雑草にはメヒシバ、イヌタデ、ジシバリ、ウリクサ、カタバミ、オニタビラコ、ハコベ、キュウリグサ、コミカンソウ、ミミナグサ、ツユクサ、ヨモギ、ベニバナボロギク、オオアレチノギク、ヒメムカシヤモギ、エノキグサ、ノゲシなどがあげられる。

104、畑地雑草群落(シロザクラス)

(相観) 畑地の小草本植物群落

サトイモ、ジャガイモ、サツマイモ、ヤサイ類、トウモロコシその他多くの作物が栽培されている。これらの畑地雑草群落はコミカンソウ、ザクロソウ、スベリヒユ、カタバミ、ウリクサ、ハコベ、ヨメナ、ノゲシ、ミミナグサ、ツユクサ、トウバナ、ヨモギ、イヌタデ、コゴメガヤツリ、アオビユなどの出現率が高く、コミカンソウーウリクサ群集にまとめられている。

105、ヒメムカシヨモギーオオアレチノギク群落

(休耕畑地雑草群落)

(相観) 一年生の高茎草本植物群落

耕作を放棄して1～2年経過した畑地に発達するヒメムカシヨモギやオオアレチノギクを主とする雑草群落である。ヒメムカシヨモギやオオア

レチノギクの優占度が極めて高い。群落内にはメヒシバ、イヌタデ、アキノノゲシ、ヨメナ、ヨモギ、ハコベ、キランソウ、チガヤ、ヒメクズ、カラスウリ、チャガヤツリ、ハウキギクなどが生育している。また、ベニバナボロギクやタンドボロギクなどの優占度の高い群落もある。これらの群落はやがてはススキやチガヤ、ヨモギなどを主とする多年生の草本植物群落へ移行するものである。

106、牧草地（人工草地）

（相観） 人工の草本植物群落

外来種を主とする牧草の栽培地植物群落、放牧地のススキやトグシバの他にシロツメクサ、ムラサキツメクサなどのマメ科牧草とカモガヤ、コヌカグサ、オニウシノケグサなどのイネ科牧草からできた草地などがある。また、ゴルフ場のコウライシバ群落や校庭のギョウギシバ群落、飛行場などの植え込みなどがある。これらの草地にはチドメグサ、カタバミ、ハマスゲ、オオバコ、コメヒシバ、ニシキソウ、ヤハズソウ、ヒメクズ、カワラケツメイ、チガヤなどが生育している。

107、水田雑草群落（イネクラス）

（相観） 水田の一年生草本植物群落

イネが穂をだして実り、イネの刈り取り後は冠水することは無い。この乾性の水田には春季雑草群落が発達する。スズメノカタビラ、スズメノテッポウ、ナズナ、ヤナギタデ、タネツケバナ、キツネノボタン、レンゲソウ、コオニタビラコ、ノミノフスマ、ハハコグサなどが群落の主要構成種となっ手織り、ノミノフスマキツネノボタン群集としてまとめられている。

湿田には夏季雑草群落としてウリカワ、ホシクサ、コナギ、タマガヤツリ、スブタ、イボクサ、キカシグサ、ミズオオバコなどが生育してウリカワコナギ群集としてまとめられている。

108、休耕田雑草群落（タウコギクラス）

（休耕田の雑草植物群落）

春季水田雑草群落は休耕一年目の雑草群落とみなしてもよい。二年目になると、水田跡は一層陸化してオオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、ツルソバ、エノコログサ、メヒシバ、アレチマツヨイグサ、スイバ、ミミナグサ、チガヤ、ベニバナボロギクなどが群生するようになる。

また、ハイキビの優占する群落、ハイキビーチゴザサ群落、シロバナサクラタデ群落、ハウキギクの優占する群落、サワスズメノヒエ群落なども発達するようになってくる。そして、やがてはススキやチガヤ優占群落と理、完全な陸地植生となってしまう。

109、市街地

(相観) 植被の少ない市街地

川内市、枕崎市、西之表市などの都市の中心部では植被は極めて少なく、僅かに公園の植え込みや街路樹などが見られるに過ぎない。主なものはクスノキ、クロガネモチなどの常緑樹やイチョウ、ヤナギ、エノキ、サクラなどの落葉樹、クロマツなどである。

110、緑の多い住宅地

(相観) 田畑や屋敷林に囲まれた住宅地

都市の周辺部や村落地は田畑や屋敷林に囲まれている。樹木類にはクスノキ、マテバシイ、クロガネモチ、アラカシ、ホルトノキなどの常緑樹、エノキ、ケヤキ、ムクノキ、サクラなどの落葉樹、クロマツ、イヌマキ、イチョウなどの針葉樹、モウソウチクやマダケ、ヤシ類などが多い。県南地方の沿海地ではアコウ、ガジュマル、タブノキなども生育している。

111、工場地帯

(相観) 植被の全く無い工場地帯

鉄筋コンクリート建築、舗装された地めんの工場地帯は極めて少ない。

112、造成地

(相観) 人工の裸地や住宅地等

山や丘を削ったり、谷を埋め立てたりして造成した土地で、住宅地や工場用地、公共の施設などに供せられている。オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、アレチマツヨイグサ、ススキ、チガヤなどが生育しているのが見られる。

113、干拓地

(総観) 人工の裸地や田畑の草本植物群落

河口付近の砂地や湿地の干拓地で、農業用地、住宅地、工場用地等に使われている。まず、アレチマツヨイグサ、オオアレチノギク、コマツヨイグサなどの一年生帰化雑草群落となり、やがてススキ、チガヤ、ヨモギなどを主とする多年生草本植物群落となる。

114、自然裸地

(相観) 砂地、岩地、火山噴火などの裸地

それぞれの成因によって違う。砂地ではコウボウシバやハマニガナなどの砂丘地植物が、岩地ではススキ、ボタンボウフウ、ハマホラシノブなど、火山の噴火口付近ではススキ、イタドリ、ツウジ類などが点在して荒原をなしている。

6. 文 献 リ ス ト

文 献 番 号	筆 者 名	発行年（西暦）	文 献 名
1	鹿 児 島 県	1 9 7 9	第 2 回自然環境保全基礎調査植生調査 報告書

7. 調査担当者名簿

番号	氏 名	所 属	分 担 分 野
1	大 野 照 好	鹿児島短期大学	現 地 調 査 報 告 書 作 成
2	木 戸 伸 栄	鹿児島大学附属小学校	"
3	寺 田 仁 志	大島高等学校	"
4	山 崎 重 喜	城西中学校	"
5			
6			
7			
8			
9			
10			

